

〈シンポジウム：変化の中の病院図書室〉
病院図書室と図書館員の専門性

高山赤十字病院図書室
木下久美子

病院図書室は、医学関係を中心とした専門分野の資料を収集し職員に提供しているが、医学周辺領域では新しい本・雑誌が次々と発行され、購入資料も5年も経つと役立たなくなることもあるなどその管理が難しい。一方、多くの病院図書室は、非常に限られた予算・資料スペースで、職員数1名前後と極めて小さな規模で運営されている。このような現状では、図書室の機能は非常に限定されると同時に、担当者の資質に大きく左右される。今回、病院図書室の代表的なサービスを上げ、担当者の役割などについて私見を述べた。

1) 資料の管理・提供

病院は医師を始め各種の専門職集団で構成されており、職員の情報ニーズに合う蔵書構成が求められる。資料を発注し分類し書棚に並べるだけの作業であれば誰にでもできる。しかし、図書館員であれば図書委員会などで選書の基準・方針を明らかにするのはもちろん、資料を評価できる情報を提供し、蔵書の利用状況を報告するなど選書には積極的に参加して、蔵書に責任を持ちたいものと思う。

蔵書が有効に活用されるには、所蔵目録を作り、新着図書や雑誌の特集を利用者に紹介するなど、資料PRが欠かせない。また利用者からの資料問い合わせや相談に応じるサービスも大切であり、担当者は各資料がカバーする内容についての知識が必要となる。

2) 所蔵していない資料(複写)の入手

小規模図書室では資料の少なさをカバーするサービスも必要で、担当者は雑誌の略誌名や不備な書誌事項を調べる方法、資料の所蔵館を調べる方法を熟知していなければならない。迅速・安価な入手には、他の図書室担当

者との情報交換が欠かせない。大学図書館に頼るだけでなく、できるだけ病院間で供給することも望まれることから、資料の共同利用を支える病院図書室ネットワーク活動には参加・協力しておきたいものである。

最近、文献申込が殺到し、業務に支障をきたすことから、文献支配を業者に委託する図書室もある。大学からは入手しにくい文献も得られるなど便利な側面があり、今後利用が増えることが予想される。

3) 文献検索システムの提供

国内外の医学文献情報がパソコンを通じて容易に検索できるようになり、近畿病院図書室協議会でも、会員の7割近くがCD-ROMやオンラインによる文献検索システムを導入している。これらの利用には、検索指導や必要に応じて代行検索など、図書室から利用者への援助が欠かせない。また各種データベースから得られる情報には、それぞれ特徴と限界があることを利用者に伝え、得られない情報の入手を援助するのも担当者の仕事だろう。

4) まとめ

病院職員が臨床や継続教育で必要とする情報を提供するという病院図書室の目的を果たすには、資料や設備だけでなく、業務について十分な知識と技術をもつ担当者が不可欠である。発展し続ける情報社会にあっては、その継続教育も欠かせない。

しかし、病院の組織図上に図書室またはその機能が示されず、担当者の業務を監督・援助するのが誰なのか明確にされていない病院もある。図書室が十分にその機能を果たしているかどうかについては、担当者だけが責任を負うものとは思えないし、不安定な立場にある者が、組織に貢献できる仕事をするのは難しいものと思う。この辺りが改善されるのを期待したい。

最近、研究所や企業の専門図書館では、情報の提供だけでなく情報の利用・加工をサポートする情報センターとしての機能を追究する動きがある。病院図書室でもスライドの作成指導など、サービスを拡大して職員学の

術活動全般をサポートするところ、病歴管理も兼ねて医療情報部として機能するところもでてきているようだ。ここ数年の間に、情報社会や図書室をとりまく環境が大きく変化しており、病院管理者・図書室関係者は、図書室機能とその組織について再検討すべき時期にきているのではないだろうか。

参考文献

- 1) 首藤佳子：病院をとりまく環境の変化
病院図書室14(4):132-139, 1994
- 2) 小田中徹也：病院における図書館員とその活動
医学図書館28(3):169-175, 1981
- 3) 山室真知子：司書の役割
病院図書室11:57-59, 1990
- 4) 浜口恵子：情報専門職としての図書館員
病院図書室14(4):154-158, 1994



シンポジストの皆さん

〈シンポジウム：変化の中の病院図書室〉 日本医学図書館協会と 病院図書室

日本医学図書館協会理事
青木孝雄

本日は標題について

1. 日本医学図書館協会（JMLA）の概要
 2. JMLAと病院図書室とのこれまでの協力関係
 3. 新生JMLAの目指すところ
 4. 新たな協力関係を求めて
- の4つの観点からお話したいと思う。

最初にJMLAの概要についてであるが、昭和24年（1927年）「官立医科大学付属図書館協議会」として当時の新潟大学、岡山大学、千葉大学、金沢大学、長崎大学によって創設されたのが最初であり、以後、文献の相互協力を主軸として加盟館員の研修など種々の活動を行ってきた。なかんずく1985年・第5回国際医学図書館会議（5th ICML）を主催したことは特筆すべきことであった。ついで、1987年には内外の医学図書館をとりまく情報環境の変化に対応すべく将来計画委員会が新たに設置され、多くの討論を経て1992年には将来計画委員会、基本問題検討会の最終答申が答申されたことを受けて1994年の第55回総会において、会則を改正、新生JMLAの誕生に至ったのである。

組織は医歯学系一般会員105機関、協力会員1機関の計106機関の会員で構成され、会長のもとに全国8ブロックから選出された10評議員と全国規模で選出された11名の理事及び2名の監事が置かれている。

評議員は地区のなかめとして地区協議会を運営するとともに全国レベルで協会を支えている。理事のもとには関連する各種の委員会が設置され協会の具体的な事業を推進している。その事業は機関誌「医学図書館」を始めとする、当協会の活動及びその成果に関する